「併し今日は半金二十五兩お渡し申さう、いづれ娘御と引替へに後金の二十五兩を渡しませう」

と云ふので、二十五兩の金子を受取り、娘を判人金兵衛方へ預け置きまして、大概女郎屋渡世をする者は、餘り人の善い者は御座りませんが、所謂孝心天の感ずる處ですか、久兵衛は縞の財布に五十兩、イヤこれは五段目の與市兵衛で、久兵衛は二十五兩の金子を入れた縞財布を首に引掛けて、早う婆に此の事を聞かして安心させようと、挨拶もそこ〳〵に女郎屋を立出でましたのが七つ過ぎ、現今の五時前、杖を突張つてボチ〳〵と新町橋を東へ渡り一ト筋南へとり安堂寺橋筋を松屋町へ出て南へ天王寺村へ歸らうと云ふ算段で、安堂寺橋一丁目まで參りますと、菊屋治兵衛と云ふ酒屋が御座りまして、その表を通りますと、プンと酒の匂ひがするので、久兵衛も根が酒好き辛抱が出來ぬ樣になりました。

「ヘエ御免……」

「ハイ、お出やす、何だす」

「お氣の毒だすけども、お酒を何卒些と許りお分賣なすつておくれやす」

「ヘイよろしゆう御座ります……オイ誰ぞ居んのか、皆何處へ行つて仕舞ふたんや、エー何程量りまひよう、入れ物をどうぞ此方へ、ア、無いのんだすか」

「ヘエ、入れ物はおまへんが桝の角からキュツと飲していたゞきたいのんで」

「ハア、甚いすみまへんが、私處は居酒はしまへんのだすが」

「ヘイ、居酒はなさらん事ばよう存じて居りますが、今お宅さんの門口を通りますとお酒の嗅氣がプンと鼻へ這入りましたので、一足も向ふへ行く事が出來まへん、腹の虫が承知しまへんので御面倒では御座りますが一杯お賣りなさつて身分が身分で御座りますので、餘り好い酒を飲んだ事が御座りまへん、お宅の好い酒の嗅をかいだら耐りまへん」

「ア、もし、マア嘘にせよ辨茶羅にしてもさう云はれると賣らん譯にはいきまへん、此の茶碗に入れたげまへよう、百八十文と二百文とありますが、どちらにしまへよう」

「ハイ、汚ない扮して榮耀な奴ぢやとお思ひにな